

日付のある雑詠と随想

海蝶夢話

卷の六

二〇一一年

谷川
修



今年はこの国に多難な年であった。わたしに起きた大小のことは誰にでもあることで、取り立てて言うほどのことではないだろう。それでも、平凡な男の日々の過ごし方をいくらか変えさせることになり、この冊子の書きぶりに変化が生じた。これまでも雑詠の詞書以上の文を書き加えていたのを、拡張してさらに雑多なつぶやきを記す試みを始めたのである。それはこの冊子を見苦しいものにするかもしれない。しかし、風に翻弄される片々の蝶も、歌にならない歌を歌い、美しい文章にならない言葉をつぶやくのは、生きる者の性と言うことができるだろう。

白氏の文集のわずかはすでに読んでいたけれども、選集の文庫が出た機会にそれを読んだ。楽天家は詩文を書きためては文集を大部にしていたようす。考えてみると、白居易ほど幸運でなかった陶潜や杜甫も、田園に引きこもりあるいはさすらいの人生を送ったのに、貴重な詩文が残されているから、自家文集を編んでいたに違いない。そんな大詩人たちのことを引き合いに出すのは噴飯ものだけれど、愚か者のあこがれはそれほど強い。作り続けているこの自家製冊子は、海辺に夢見る蝶のささやかな存在証明である。言葉をつぶやかなくなつたときには、身体とともに鳥辺山の煙にしよう。

今年の賀状

新年のお慶びを申し上げます。

故郷での暮らしも一年経ちました。早春の山にわらびを摘む生活も、ここは首陽山ではありませんから、わかめを刈りあさり貝を採って暮らしが成り立っております。すべてに介護の必要なわたしの母を、介護制度の助けを借りて世話をする家内のそばで、右往左往しながら、わずかな野菜を育て果樹を植えて、老境を耕しています。ところで、このいかに文楽を上演できる劇場があり、人間国宝の操る人形の運命に涙し、名のある俳優の演じる歌舞伎や狂言の人間ドラマに感動しております。先日はテレビで、教室に「知今昔、知天地、…」と朗読する声の響く映画を見て、時を刻む天地の間に置かれた人間の生を考えさせられました。いなか暮らし二年目の今年は、もう少し余裕をもって四季を暮らすことが出来るだろうと期待しております。ご健勝をお祈りいたします。

一月二日

陽を浴びたあられが跳ねて花に入る

中国の若い友人に新年のメールを出していなか暮らしのことを書いた、次のような文が返ってきた。「I am happy that you are pleased

with your retirement and enjoy the rural life very much. I think
your dream has been accomplished. You became a free resident like
Chinese poet Tao Yuanming. 采菊東籬下 悠然見南山・・・」。

一月三日

眼の冴える冬の夜の床頭蓋骨両手で撫でてわたしを測る
「朱子人間を、宇宙内で自己と万物が生じる理由・根拠を自覚できる
特殊な存在者であると見る」 井川義次著『宋学の西遷』。

一月七日

水赤く金魚の形雪の池

一月十六日

凍りつく池は山茶花活ける花器

赤い花凍り金魚も身じろがず

寒の雪大きな船をからめ捕る

(目の前二百メートル余り先)

一月十九日

寒の空人焼く煙関知せず

花の蜜吸ってメジロは生延ばす

(火葬場で)

粉雪と椿が落ちて散花する

(同じく)

一月二十日

暖足らぬ寺の本堂礼参り

一月二十二日

時積もる念仏道場今日もまた念仏響く、世々に在る時

浄土真宗の葬式に出たら、今度は浄土宗の仏事。故郷に帰つての生活は、まだ少し残っているゲマインシャフトの濃い人間関係の中にある。人の死にまつわることで殊にそれが甦る。今日ちようど講談社『本』が来て、「『眼蔵』をよむ」で宮川敬之師の「有時」巻の読み解きに接した。「念仏のような、無常に対抗し、永遠なる救いへ自らを投企するというような試みではない。坐禅は、無常とは別のあり方を示すわけではなく、むしろ無常のさなかに浸りきる行いである。自らの才覚やらそれこそ「佛性」やらを頼みにすることはない。そこには救われるという保証もなく、絶対的な根拠もない。…無常を觀じ、吾我を抑え、絶対的な根拠のない不定形さに堪え忍ぶそのときに、修行の「とき」は起動する。…むしろそれは、われわれの意識や思考、身体のかまえそのものが変わり、はらの底の結ばれがほどけ、無常の世界をそのまま生きていけるように変容することだ

あるだろう」。これらの言葉を展開していても、親鸞の念仏と道元の坐禅が通底するような境地が出現する可能性はないだろうか。

『本』の巻頭には上野修という人のスピノザ論があつた。『エチカ』第二部定理七「観念の秩序および連結は事物の秩序および連結と同一である」を引いて、「思考属性と無限に多くの観念が生じるということと、あるどれかの属性で無限に多くの事物が生じるということは、実は同じことの二つのあり方だ」と言う。だから、「神」（自然・現実）とは全属性にわたるありとあらゆるものが真なる観念と一致して存在するような、真理の絶対空間のことであり、われわれ自身、身体とその真なる観念との一致、つまり一個の真理としてその局所に存在している。スピノザはこの「身体の観念」が「精神」であり、一致がいわゆる「心身合一」なのだと説明していた——のだと。この論は、坐禅につながる道筋を示唆しているように読み取ることができるか。

「無常である時」は、そのような古今の賢者のあり方と「照応しあい、関係しあう」可能性がある、と宮川師は説く。

二月四日

田起こしを鷺が喜ぶ春立つ日

赤杉の林映して水行かず

立春の陽射しに磁針身じろぎす

二月五日

人に同じ寒さいとわぬ猫の恋

二月八日

水鳥が波紋を残す春の湖

二月二十四日

春の陽の力味わう浦住まい

二月二十五日

『緑の家』読めば霞のにびの海

リョサ『緑の家』を読んでいる。この二十世紀半ばの小説は、それまでの先人が開発したさまざまの手法を盛り込んだ先端的な小説なのだを知った。『嘘から出たまこと』の書評で論じたことをみな試している。語り手は登場人物たちの会話の中に溶け込み、会話は場面の中にまぎれこんでい

る。場所も時も異なる挿話が、関連も分からないままに並列的に記述してあって、それらがどうつながるのか予想もつかない。この小説はよくよく構想して組み立てられているのだろう。『嘘から出たまこと』で何度も確認された、「小説の神髄は文体と構成にある」ということを実践しているわけだ。

文章について言えば、短い文がぶつきらぼうに続いて投げ出されているように感じる。日本語への翻訳がそれを強調してしまうのかもしれない。日本語では、短い文の語尾が音声的に単調になって、よけいにそう感じるのだろう。

チュニジアで貧しい青年が自らを火に焼いた炎は、アラブ諸国に広がっている。
つつある。

二月二十六日

悠々とした狂言を観た午後はじゃがいもを植え季節と歩む

二月二十七日

さわさわと椿咲く森さんざめく

(萩笠山の椿だけの森)

三月

母が喉を詰まらせ、以後入院。ほかにも諸事あって多忙。

掌を合わせ津波見つめて老女立つまことに悟る生かされる身と

磐城の地なお雪が打つ非情の理

人生かす自然の無情春に雪

近松門左衛門の名作浄瑠璃を初めて観た。「曾根崎心中」。わたしにいい耳がなくて、三味線にのって語られる言葉を完全には聴き分けられない。有名な道行の出だしの名文を、印字されたものほどよく味わうことができない。しかし、人形の動作が描く物語はしっかりと胸に届いてくる。……パンフレットの中の一文が、太平洋戦争の始まった日に加藤周一が、やがて迎えるであろう敗戦と死さえ予感しながら、文楽公演を観に行つたという『羊の歌』のエピソードを引いている。東北太平洋岸の大地震と大津波、さらに福島第一原発制御不能の事故が加わって、連日の報道がほとんど戦争の被害であるかのような感を与える中で、文楽の悲劇を見て加藤周一を捉えたであろうような気持が湧き出る。

しかしテレビは、現実の普通の人間たちが、演出された人形劇のように

は美しくないけれども、人の胸に迫る心持で独自の行動をすることを映し出す。その一つ一つが感動すべき事なのだと思う。

掌を合わせ無常の縁起凝視する

春に会う月の兎の見る悲慘

対岸の灯がべたなぎの水面に何本もの光の柱をつくり出し、澄んだ夜空には如月十五日の月が懸っている。旅の聖に身を献じた兎が月から、東北地方の惨状を見つめる。

永い永い歴史を展開している宇宙の一隅に生じた地球の一時に、数えきれないささやかな——なんとという怖ろしい——出来事が起きて、生き物はそのおおむね穏やかな刹那に、いのちを引き継いで存在することを許されている。スピノザ流に言えば多くの身体の観念が、全宇宙の中であらゆる時を経る縁起を感じようとしている。わたしは今日その春に会っている。

耳澄ます白い馬酔木の鎮魂歌、なお数百の早鐘が鳴る

四月

東京電力福島第一原子力発電所の危機的状态が続いている。

福島第一原子力発電所の事故で、政府をはじめ局に当たる人々の行動の様式は、日本人の組織の宿痼だろうか。事態を包み隠し、大局的に重要な問題に触れないで、今現在取り組んでいる出来事を発表して、人々の注意をそこに向ける。十五年戦争の時の報道と違っているだろうか。その不十分な情報から、根本的には何が進んでいるかを推察するしかない。さらに悲惨な事態に向かっているようにさえ見える。この列島に住む住人として、この自然と人事の縁起が少しでも穏やかなものに向かうことを祈るしかない。

NHK「クローズアップ現代」が、その福島で被害にあっている人たちの困難を伝えている。困難に立ち向かっている人たちが、本当に真剣に考える場に立たされて、鋭い問題意識に目覚め、なかなか立派にふるまっていることを教えられる。ただ言葉の問題として、テレビの映像はとも情緒的な言葉を発する多数の人々をも映しだす。よく考えて肚に響く言葉を発するようになれば、悲惨を乗り越えていけないだろう。

母の胃瘻の手術を待ちながら考えて、肚に応えたことがあった。わたし自身も原子力発電の技術に対して判断をあいまいにしてきたということだ。誤りを認めなければならぬ。福島原子力発電所事故についてホームページを立ち上げた友人へのメールに、感慨を書いた。

—— 今度の事故は、制止できない核分裂反応から出るエネルギーを利用する「技術」は、いったん事故が起きたらそれで終わりにならないという点で、他の技術と本質的に違う、ということを明らかにしました。小生も初めてそれを知ったと言うべきかもしれません。その水で永続的に熱を排出しなければシステムが危殆にひんするという付帯条件によって、水を使ってその熱を取り出す方法自体が原理的に危険を孕んでいるという矛盾。ここでは「想定外」という言葉は許されませんね。使用前の核爆弾の方が、核分裂エネルギーの平和利用よりも、熱制御しやすいという皮肉に呆然としています。――

去年の猛暑に耐えた木々の花付きがいい。住人が帰ってきて少し手入れをしたということもあるかもしれない。幹に付いた虫を退治した桜も、今年初めてたくさんの花を開いた。満開を過ぎて一つ二つと花卉が散り始め

ている向こうに、水平線の見えない内海が実に静かな風景をつくっている。風いだ水面に石灰石を運ぶ船が浮かんている。この光景は、何度も見てまぶたに焼き付いた映像、津波が家々を飲み込んでいく映像との、埋めることのできない落差を突きつける。

しばらくすると思考が働き始め、次のような思いがよぎった。信じられないほどの津波が押し寄せるとき、島や岬や山並みは揺れても動かず在り、水平線は津波の去ったあとには変わらずにあるのだ、と悟る。人間の一時に、人間を容れている自然の変化はなおさやかなものだと思はれる。地球にとつては穏やかな変化の中で、人間は生きることができなのだ。それを無常と観じる思想は、地球がはるかに大きな変動をしていた、またするであろう、人間の生存を許さないような天変を見据えるのでなければならぬ。仏教の無常観はそこまで到達していた、と考えるべきだろう。……わたしは春の美しい内海を見つめている。

またしばらくして、大地震と大津波を引き起こした地殻の変動——人の時間のうちで起きる移動は小さなものだ——は、地球の内部で原子核の崩壊によるエネルギーで起きたのだ、と思ひ至る。煮えたぎっていた孤独な地球が宇宙へ熱を放出して冷えて、外殻が固まってからは、内部での核反

応エネルギーがものを溶かして、流動して地殻を動かしている。原発事故で制止できず危機を引き起こした核反応と同類のものが、プレートを動かして地を震えさせる。他方で、太陽の内部で起きている核融合反応のエネルギーのささやかな一部が地球に降り注いで、生命が生まれ、人間が出現したのだ。まことに、無常の自然の因縁生起によって今ここがあり、人身を受けたわたしが在る——と識る。しかしそれは単に知識にすぎない。依然としてわたしは、どのような行為をなすべきかという問いとして在る。そしてその問いは、大震災で命を失った多くの人々の無念さや、肉親を失った人々の悲しみと無縁なのではない。

明日あると思ひ果樹畑の草を抜く

いなかの生家に帰って生活すれば、古い共同体の慣習に参加することを求められる。神社の世話人の当番は、信仰にかかわることと考えれば辞退したいところだけれども、未分離のほかの行事を拒絶することにつながるから、逃れることが難しい。古い行事に興味もあるので、御神幸の人手として出た。神社は二十余りの集落を氏子に持つ八幡宮である。本殿での五

十分余りの祭礼を初めて見た。当番の集落から出た奉幣使と介添えが伝統の衣装を着て役目を果たすのを、宮司が迎える。

昼食をみんなで食べて、本殿で餅まきをする、神輿を担いで御神幸が始まった。日本海に面する浜辺の近くに石の祠がある。石碑に「八幡宮旧址、宝亀三年降臨地」と刻んである。七二年のことだという。それから浜辺へ神輿を置いてお祓い。続いて浜の宮というところへ。一時期ここにあった杜を今の飯山に移したものである。それでも集落の人たちが出迎えて、餅まきもあった。

道中、古い村落共同体の営みの名残を体験しながら、昔この習慣を埋め込んで受け継がれた生活があったことを思った。こういう慣習を営むことが人生を過ごすことだったのだ。それよりもほかの何かをしなければならぬという強迫観念がないから、時間はゆったりと使われる。この行事に参加する人たちは、春の一日をなんとなく身を清めることをして過ごしたと感ずることができただろう。

内奥で白い鏡が映し出すわが身心の震えを感じる

運よく火に焼かれるまでこの髄膜腫を持つていくことができるか？

漏れ聞く慈円の透徹した歴史観を知るために、『愚管抄』を読んだ。天台座主慈円は、歴史の移り変わりを後鳥羽院に忠告するために、この書物を書いたのだらうという。現代から見れば、文献批判や、歴史を動かす動因や、社会・経済構造の概念などをよく知らなかったという欠陥があるけれども、優れた知性の持ち主が、歴史の転換に立ち会ってその同時代史を書くことになったのだと知られる。

慈円和尚は、歴史の舞台で重要な役割を演じる人間たちの振る舞いをよく見て、その性格まで見透しながら、事件の成り行きを把握している。そして通史として眺めれば歴史が変遷して行き、後戻りしないことを理解する。それを、そこに道理があるからだと捉える。仏神や悪霊まで、当時の人々の通念となっている理解の仕方を信じて説明する。後鳥羽の説得のためかもしれないが、結局は摂関家に生まれて支配層のイデオロギーを身につけているということだろう。それでも、その支配層が衰退していく歴史の現実を受け入れるほど理性的だ。そこに歴史を否定せず受け入れるという姿勢が生まれる。

現代の社会学・歴史学は、歴史の舞台を回すのは、経済的・社会的構造が変化していく運動であることを知っている。その見方からすれば、慈円

が在った経済社会は、租税の分配と徴収の体制、つまり支配体制の変わり目にあつた。それにしてもその変化は、大陸から離れ外国からの征服がなかった日本では、非常にゆるやかなものだつたのだ、と感心する。八世紀初頭に完成した律令制が、貴族の私領としての荘園制に浸食されていく過程は、後々まで国司の官庁の存続を許した。そうしながら私領に専有化していく過程が進んだのだろう。太上天皇までが院として公領を私領化した。その公領・私領の収入の一部を在地の武士が切り取つて、京都と武士との持ち合いの体制は出来上がったわけだ。

それからさらに武士の取り分に帰するのに、室町幕府から戦国まで三百年余りかかった。…そして、封建制は完成する。その封建制は中央集権の色合いが濃く、また当初から国替えが行なわれて、封じられた領地は「公」のものという概念を孕んでいたから、近代への転換は容易になった、と言えるだろう。今わたしも、日本と世界の歴史が大きく転換する時代を生きている。感慨を覚えないわけにはいかない。

原発事故についての報道が続く。今頃になって、核燃料溶解が起きていたことを認める。危機と重圧は当分続くだろうことだけが理解できる。

立夏

潮の香やなお地にすがるいのち在り

空探るぶどうのつるに添え木する空の空なる世界にすがる

明日母が退院することになり準備を進める・・・

ははしんでひとはいつでもよきできぬしいんでしぬとおしえをうける
いもうとをいたむけんじのしのようなけだかいしらべみにわかずおる

人の死にまつわる儀礼はたくさんあって、その行事をこなすことで日が
経つように出来ている。七日七日に僧が来て読経をするというのも、昔の
人は父母の死をそれほど悼む心持が強かったのだろう。

ところで七日という数は、日月火水木金土の、地球の空で季節ごとに位
置を変える天体の数に因む七曜から来ているのであろう。それはバビロニ
アあたりが始源の地だろうから、インドから仏教に付いて来たのだろうか、

インド・ヨーロッパ語族では七という数が特別だから。しかし天体と暦の知識は、仏教以前に中国に入っていたとも思われる。『紅樓夢』でも七日ごとの法要があるから、日本で古くからの風習と考えているこれは中国から入ってきたのだろう。

インターネット・ニュースに、「ガーディアン」が何かの記事が載っていた。S・ホーキングがインタヴューに答えて、「天国はない、死後の世界もない」というようなことを語ったと。「人々はどのように生きるべきか」という問いには、「自らの行動の価値を最大化するために努力すべき」と答えた。物理学者としては当然の発言だが、おそらく日本よりも信仰心の強い人が多いだろう社会では、世界的に有名な物理学者の言葉はそれだけ注目されるだろう。日本では、僧俗に極楽を信じている人が本当にはどれだけいるか、よく分からない。人々と社会はそのことをあいまいにして取り上げることがしない。

『本』、上野修のスピノザ論、

——スピノザによれば精神は自分の外にいて、証明の中でしかその自分に

アクセスできない。精神が自分だと思っている「私」でさえそうなのである。同時代人から「有徳の無神論者」とあだ名されていたスピノザは、人格を持った超越神を認めないのに、その生き方は、人となりを知る人がみな認めていたように、高潔で、親切で、申し分なく信義に満ち、当時のニユアンスを込めて一言で言うなら、敬虔なものだった。――

『本』、宮川敬之師の道元『眼蔵』論、

――無常のさなかで無常に辛うじて抵抗する修行の「とき」の到来――

梅雨に入る海に錦の鯉送る

(鯉の水葬)

支え合う無花果と我、実り期す

読み残していた『図書』四月号の表紙には、『エッセー』手沢本の最終ページの写真が載っていて、モンテーニュの自筆の書入れを見ることができた。表紙裏に解説がある。「われわれは自分の内側を知らないために、自分の外側へ出ようとする」云々への補筆は、「でも、そうした竹馬に乗ってもどうにもならない。竹馬に乗ったとて、どっちみち自分の足で歩かな

六月

ければいけないではないか。いや世界でいちばん高い玉座に上がったとしても、われわれはやはり、自分のお尻のうえにすわるしかない」。

感服させられた先人の言葉を引くわたしの行為は、まさしく竹馬に乗る行為だ。自分の足で歩くことができるのかどうかさえおぼつかないのに。

I・ウォーラーステインのコメンタリーは、日本の大震災と原子力発電所事故のことに触れない。アラブ世界の民主化運動や、イスラエルからパキスタンまでの諸国でのアメリカの困難とヨーロッパとの疎遠を論じ、アメリカの衰退を懸念する。アメリカから見た世界情勢にとって、日本の困難とそれによる衰退は二義的な問題だと認識されている。

J・ジョイスが二十歳代前半に書いたという『ダブリンの市民』を読んだ。翻訳からは、文章が特別新しいのかどうかよく分からない。しかし、記述が年齢を感じさせないほど完成していて、どの短編も一つの小説世界を創りだしていると思う。むしろ抑制された語り口とさえ見える。

わたしは言葉が表現している物語は味わいがあると単純に思ったのだが、「解題」の解説する分析は、明示的に語られていない見方を提示する。

二十世紀文学最高の作家の一人と認められた人の作品は、多くの文学者が研究して、作品の奥に暗示されている文脈やそれ以上のものが切り出される。作者はいつたいどこまでそういう厚みを意識していたのだろうか。多くの文学作品をそこまで深読みしなければならぬとしたら、わたしのような初心者はお手上げだ。

一つの物語が主人公の「自己欺瞞が暴かれる物語でもある」と認識しなければならぬとすれば、すべての人間は完全ではなく誰にも自己欺瞞があるから、観察される人間の言動は多くの文脈をもち、せめぎ合う言動が前後してあるにちがいない。自身はその矛盾する成り行きを把握することさえむつかしく、多かれ少なかれぎくしゃくと考え振る舞うことになる。その言動が大きな難点なく進んだら、たいていの人間にとって「よし」とすべきほどだ。文学研究者と違って人は、ほかの人間の現象を観察して、正確ではない文脈を想像することしかできないだろう。

『原始仏典』の中でゴータマ・シッダルタは、形而上学の問題に、何の見解も示さず、沈黙をまもった。そこに超越神はいない。

——人は死後存在するという考えがあろうと、人は死後存在しないとい

う考えがあろうと、まさに、生まれることはあり、老いることはあり、死ぬことはあり、悲しみ・嘆き・苦しみ・憂い・悩みはある。現実にとそれを制圧することをわたしは教えるのである。――

わたしは竹馬に乗ってでも、この精神の高みに近づきたい。

ホトトギスと歌い草刈り無心得る

濡れ縁に臥せば風連れ夏の蝶

出漁の船音響く夕間暮れ家路を急ぎ鳴くホトトギス

中国滞在中のことを文章にされていて、単調と感ずるところがある。忙しかった時期に日記帳に書きとめた元の文章に力がないのだ。精神が生きて働くには、時間があつて自由に活動するゆとりがなければならぬと知る。

クワガタの鋏落ちている梅雨の墓地

梅雨に咲く萩移植して母の骨納める準備入り江見る丘

葬列が里の道行く上の空不如帰鳴き森へと渡る

葬儀の参列というようなことも互酬の規則の中に入る。

青い海見る緑青の寺の上風に乗る鳶幾たび回る

福島第一原発は、かろうじてさらなる惨事に至らずにある。吊り下がったままの剣に、人々の感覚が麻痺していくことが怖ろしい。避難している人々に過酷な宣告が告げられる日がやがて来るだろう。

かつて偉大な文明を誇ったギリシアも衰退を免れることはできなかった。しかし今もお、国会を包囲する民衆がいる。

一家中对岸に立つ虹仰ぐ

母の忌も明けてあじさい剪定す

夕立に伏す濡れ萩を抱き起す

(既に一度花が咲いた)

七月

アメリカの研究者の試算によれば、アフガニスタン・イラク両国で米国その他が始めた戦争で、巻き添えで死んだ人を含めると、死者二十二万人、そのうち軍人は約二万人。米国の戦費一八六兆円。何という…

植えた露守り草抜き蚊と戦

イチジクを夫婦で分けて日を終える

(一個の)

夕立の注ぐ海には波もなし溶解進む国に身を置く

J・L・ボルヘスの『詩という仕事に就いて』の中に、「私の信ずるところでは、生は詩から成り立っています」という文があった。多くの文人は詩人がこのように言う。新奇で耳を驚かすような言挙げはない。しかし耳を傾けるべき講話だ。多くの書物の読みと研究がその文学の中身だと知られる。

文中、ヘラクレスの「いかなる人間も同じ河に入ることはできない」という言葉に出合った。既に知っている言葉だけれども、三峡を下る船の上

で、杜甫の詩に誘われて、「杜甫の詩心正に汲むべし、古今不易人生の川」と書きとめたことを思い出し、再考を促された。一人一人の人生の河はそれぞれ違うものだということ、わたしが詩心を汲むことができたなら、それは杜甫の詩心とは異なるものだということだ。その通りだろう。しかしそれでいて、人間の生は人間一般の条件の下にあって、人生という河は、杜甫の時代も今も変わらない問いを問いながら流れている。その問いを深く引き受けようとした先人の問い方に汲むべきものがあるだろう。それを追求したら、わたしにも一片の新しい詩句が得られるだろうか。

嫋やかに水にかしいだ鬼の百合池には倦まず響く水音

夏の海を金色の蜜に変える月

歩み入る入日の照らす虹の堂

母が亡くなった日に見失った鍵が出てきて、対岸の虹の堂へ誘う。

百合の花はらりと落ちて複眼と翅もつ者が見届けている

八月

夏の午後翅もつ者が複眼で暑い世界を涼やかに視る

盆前に網戸張り替え庭新た

姫睡蓮無事の日献呈す

『白楽天詩選』を読んでいる。「人間要好詩」という句に出合う。

立秋の猛暑に果てる庭の蟹

月光が火照る瓦の熱冷ます夏と秋とのはざまの夕べ

猛き夏暮れて一日老い進む

永久に在れ月光照らす美酒の海

初盆の家々が盆踊りの世話をするという風習があつて、朝からその役目。今年はずいぶん昔通りの十五夜の日で、月を期待したのに、夕立後曇る。

盆の朝のち短い蝉囀す

夏行くや汽水を探る鯔の群れ

潮満ちる川岸を行く数珠五つ

（対岸を祖父と四人の孫が一行に並んで）

百日忌季節を秋に旋回し雨に一枝百日紅咲く

（今年初めて咲いた）

三度目の花を咲かせた桔梗採り書齋に活けてこの生学ぶ

辺見庸の『水の透視画法』に、八十歳の串田孫一の語った「地上にあるものはみんな海のなかへ吹き飛ばされてしまった」風景を、自身の夢に見たことが書かれている。わたしは、人間のいない海の風景という言葉で、最初人間が地上に出現する以前を、次に生物が生まれる前の光景を思い浮かべた。

それから、本当の人間滅亡のことを考えてみた。すると、人間はある日突然姿を消すのではなく、その過程が悲惨なものであることに思い至った。

タクラマカン砂漠のオアシスで水が涸れていくような環境変化では、人口減少があったとしても、生き残った人々は移住したのだろう。しかし、圧倒的な格差のある他の人間集団が入ってきた地域では、集団は消滅したのだ。樺太アイヌはそのような状態になったと聞く。それに近い状態になった民族が世界各地にあるに違いない。地域コミュニティーは、世代を経るにつれて形を崩していき、しだいに活力を失い気力も萎えていくのだろう。最後には子供のいない家族だけになる……。その過程を考えることは悲惨すぎるほどだ。

一つの国の衰退はそれとは違うだろうけれども、いくぶんか似た様相を呈するだろう。今日の日本の農漁村に住んでみれば、老人だけの家庭がしだいに増えて、家々を巡ればさびしい気分をぬぐいきれない。東日本大震災の復興計画が議論されているが、この現状を直視しなければ、負債だけが積み上げられて経済の苦境を深めるだろう。このままでは、中都市以上の周辺だけに人間が住みにくく暮らして、そこから遠い地域コミュニティーが縮小していくだろう。それは、何世代かけて徐々に進行する。活力が失われるまでになることを心配するのは杞憂だろうか。

九月

今朝、五つあった花が六つになった
四、五、六とふぞろいの数の花弁
今年三度目の花を開いた一枝の桔梗の
蝸牛の器の中の紫色を
モンテーニュが頬笑んで見つめている
いかに死ぬかを学ぶのだと。

楽曲が拙い過去を想起させ、ふと笑みのある明日を思う

潮風にとりわけ弱い落ち葉寄せ放送で聞く台風被害（災害の年だ）

青葉散る野分のあとの浜の寺黒衣の列に猫迷い入る

畑起こせばまだ夏陽射し玉の汗

内海ないかいに名月を釣る修行の身

禅師の耕す雲の上に名月。心の海がいよいよ深く波静かで、澄明な満月をそこに映しとることができれば、円月相の片鱗を窺うことができるか。

中秋の空渡りゆく者の声

三峽を閉じる眼に画く白氏の詩

口閉じたアケビを活けて歴史読む

九月二十三日
己が愚を噛んで彼岸の海を見る

九月二十四日
蜘蛛の手を蝶が逃れて秋日和

僻遠の浦にまれびと訪ね来る喜び示す柿と梨とで

九月二十五日
蝶の子が花木貪る秋彼岸
付句 羽化した蝶の迷いは果てず

九月二十六日

平安を願ひ蝸牛の室に座す

白居易は現在墓のある香山に隠棲したのではないことを知った。洛陽東南部にあつた邸宅が終の棲家だつたそうだ。香山寺に出入りし香山の風光を愛して、号を香山居士としたものか。Wikipediaを書いた人は、居士を居室につなげて、香山に隠棲したと勘違いしたようだ。大邸宅に住んでいた居士は、自分を隠者と考えていただろう。晩年仏教に親しんだというから、在家の仏道者という意味だったのかもしれない。それでも、五合庵に住んだ乞食僧とは違うことになる。

九月二十七日

風ぐ海にヨット動かぬのどかな日、朗報一つ、頬笑み一つ

十月五日

「偶作」

紫荻垂頭重陽雨
青鷺独佇白瀉海
習樂天詩作一日
夕望天際堪感慨

十月八日

キリギリス見て走る鎌止め得ず

眼が虫の姿を認めたのは、構えた鎌を振り払う直前だったように思う。
キリギリスがどうなったかは分からない。

十月九日

昨日、この頃本を開いてばかりいて役に立たないことを連れ合いに責められたが、「北窓三友」詩は言う。「今日北窓の下、自ら何の為す所ぞ、……、古人も多く斯くの如し、……、道を樂しみて帰する所を知る、……、縦い未だ以て是と為さざるも、豈に我を以て非と為さんや」と。

「浦の苫屋の老夫の歌」

もしも琴が弾けるなら

十三夜にふさわしい

曲を奏でることだろう。

もしも酒が飲めるなら

空と海との二つの月を

盃出して招くだろう。

もしも詩歌を詠めるなら

思いのたけを夜明けまで
歌い明かすことだろう。

琴・酒・詩とを嗜むほどの
もしも君子であつたなら
このひと時をとこしえと
等しいものにするはずなのに。

十月十一日

「月を仰ぐ老夫」

(老夫はもとより白文公や定家卿ではない)

一日に二合の飯を食べ
草を育てまた刈る
無益の作業で得るものは
日々に添える秩序と平静と。
苦屋に帰り 作務衣のまま
手植えの桜をふと見れば
葉を吹き落した潮風に抗し

咲かせた花が五六片。

今日は十五夜 対岸の月が

さざ波に千の光を散りばめる

老夫も腰を伸ばして

明日のよい日を希求する。

反歌

十月十六日

須佐之男が無角の牛を焼く浜の海には深い青が漲る

牛の角削いだ神々消え果てて人の賑わい求める祭り

十月十七日

土に入り実を結ぶ豆師と仰げ

件名… ご無沙汰しています。

その後どうしておられますか。あいかわらず忙しい日々を送っておられることと推察します。この頃、このいなかの地にはメールがあまり来なく

なって、小生もめったに出す機会がありません。天災・人災に加えて、どうやら転調の世界にいるらしいことがぼんやり者にも分かります。敗戦の年に生まれて高度経済成長を経験し、今はその後半の幕を見ているのです。わが家では五月に母が九十二歳で亡くなりました。アルツハイマー症終末の状態だから、故郷に連れて帰り看取るということだったのですが、その通りになりました。それでも人は予期しない時に亡くなるのだということを知りました。

そして、夫婦二人の生活となりました。わずかばかりの野菜をつくったりしています。別に一つ荒れた畑があつて、長い間ほつていて荒れ放題になつていたのを、去年シルバーセンターの人たちに刈ってもらつて、そのあと何日もかけて、根を縦横に張り巡らしていた葛を退治しました。文字通り葛藤を克服するのはたいへんなもので、根気のいる仕事でした。今年も、草の生えるのにまかすわけにもいかず、ときどき草刈りをしています。日本の気候はこういう作業を省くことを許しません。まわりにも同じような状態の田畑がたくさんあります。農漁村では、耕作地がますます荒れ、魚も減つて、人の数が減っています。そこに暮らしているとこのことがよく分かります。小生は退職者ですから、まだましな方ですが、貴兄にもいなか暮らしの人々の苦勞が分かるときが来るかもしれません。いなか道で

十月十九日

スズの子をみすずの歌う海で釣る

この地方ではサヨリのことをスズと呼ぶ。

荒れ畑の草を刈っている田夫を見かけたら、わたしと誤ってください。実は、年寄が慣れない草刈り機を使ってけがをすることを恐れ、昔ながらの鎌で刈るのです。この無益な作業は、からだを動かさない小生のエクササイズで、健康と長寿を氣にかけていることになります。

退職してひまができたなら、こちらの方にお出かけ下さい。野菜に、栗かイチジクぐらいはごちそうできます。

十月二十六日

燕間引き燕の現成待ち受ける

十月二十七日

山を見るわたしの前で群れ持たぬ老青鷺が海を見ている

十一月一日

街道に紅葉すすきと陽を享ける

T P P 反対と言う案山子いる「小日本」の旗立てた辻

環太平洋パートナーシップよりも、ウォール街を占拠せよという全地球パートナーシップに連帯する案山子と肩を組もう。

十一月八日

凡人に願いを残す平凡な秋の日暮れてただ耳澄ます

十一月九日

百五十たまねぎ植える者がいる、土と遊んで世界に溶ける

幼年期をつづるW・ベンヤミンの文に触れた。その美しい文章は、幼い日の行動に一つの気分を添えながしか意味を付与して、成人した人間の言語空間に生を再現して見せる。何かの主題を論じて主張するのではないけれど、読む者に印象を残し、影響を与えないわけではない。そのみずみずしい感性と知的な語り口は秀逸だ。わたしが自分の幼年期を想い出そうとしても、これほど鮮明ではないし、生活臭のするもので味わいあるものにはならない。それは単に気質や才能のせいだけではなく、幾分か生活の豊かさに関係しているのだと思う。ヨーロッパのブルジョア家庭が育くむ情感をうらやましく思う。時代にはるかに遅れて、今頃ベンヤミンを読んでもこんな感想をつづるのも愚かだけれど。

十一月十三日

万物が消えて光の降る天地

十一月十六日

葉の落ちた銀杏に海月懸る朝

十一月十九日

名声なき榮譽に包まれ

光輝なき偉大さを秘め

報酬なき尊嚴を保ちつつ

というエビグラフで始まるベンヤミンの『ドイツの人びと』の序は、ゲートの死について語り、「この時代の終わり、市民階級が保持していたのはその地歩だけで、それを勝ち取る際にもついていた精神を、この階級はもはや保ち続けてはいなかった」と言う。この見方は、日本の歴史に関して二度意味をもつ論評になっていると思う。一度目は、一八六八年の維新から敗戦まで。明治期前半の人々は、市民階級というよりも新たな国民と呼ぶのがふさわしいけれど、四十年の内に建設的精神を失いだした。二度目は、無条件降伏から立ち直る時期に発揮された精神だが、それは三十年も経つと、地歩を勝ち取る以前に衰え始めた。わたしはその二期目を生きている。そして今、老年のゲートが同じ世代の友人に宛てた手紙に書いた

感慨に共感する。「富と迅速、それこそ世の人びとが讃嘆し、……相変わらず平均的凡庸さのうちに留まり続けるのです。……私どもはここまで携え歩んできた信条を、なしうる限り保持しようではありませんか」。

弟から兄Ⅰ・カントへ宛てた手紙についての評言をなぞってつぶやく。

カントの比類のない人間性は／そのつましい生活と不可分である／
その時代からはるかに世を経た今／あの高みに近づくことの何と不可能なことか／たとえ書齋を無憂宮と名づけてみても／

「追憶」という映画観て追憶を探り当てればただささやかな

すぐそばに極楽鳥の居る世界

十二月二十五日 水仙を見上げ凍えてヤモリ伏す

十二月四日 日中の歴史を刻む場所に立ち海峡過ぎる時を見つめる

来日した上海交通大学の友人夫妻を招待し、萩・下関を案内した。

交通大学の壮麗な東門脇に、大きな石板を並べて幅十メートルもあるような記念碑が立ち、前身の南洋公学創立の端緒となった光緒帝への上奏文が刻まれている。その字面をたどって、日本が鹿児島・馬関で苦杯をなめ、諸藩が青年を海外に派遣したことや、明治維新のことが記されていることを知ったのは去年のことである。上奏文の提出・裁可された年が一八九六年だと気づいた一瞬、教育改革から始めて国の再興を期した中国が目的を果たして今隆盛しつつあることを悟った。一八九六年は、朝鮮支配を争った日清戦争に敗北して下関条約を結んだ翌年だ。馬関という地名は、日本の一つの藩の苦難を教え、同時に自国の屈辱を示し、中国が遅れをとった歴史を清朝の高官に強く印象づけたに違いない。

出発前にわれわれは、一八四〇年のアヘン戦争と五三年の米国艦隊日本来航以来の歴史を話題にしていた。最初の日に門司側から海峡を望み、対岸の馬関・下関が四国連合艦隊に屈した話をし、わが家で、外国兵に占領された砲台の写真を含む幕末の写真集も見せた。二日目、維新の志士の出た萩へ。吉田松陰の小さな私塾などに案内して、今回の旅に関連する歴史を解説する。松陰の門弟だった伊藤博文は長州からヨーロッパに派遣され

た一人で、最初の総理大臣となり、後に下関条約調印に臨んだ……と。次の日には下関の日清講和記念館を訪れた。清の全権大使が宿舎から通った春帆楼脇の小道は、李鴻章道と名づけられている。日本人に狙撃されて負傷した李は、この小道を通るようにしたものらしい。インターネットで予習した夫人は、伊藤が後に韓国の愛国者の銃弾に倒れたこと、その場所がハルピンであったことに驚いていた。それは日露戦争のあとで、日本が中国東北地方へ進出した年だったことを説明する。

交通大学由来の上奏文に触発された日中の友人が、相関しつつ歩んだ両国百五十年の歴史を思いながら立つ。かつて往来した多くの欧米船に代わって、今ではこの海峡を日本・中国・韓国の貨物船が盛んに行き来している。目の前を通るあの大きな船の積み荷は中国産品なのだろう。

十二月六日

小春日に極楽鳥が二羽となる

十二月七日

朝霧をついて行く野にまだ紅葉

十二月十日

売れ残りみぞれの道を御札売り

八幡宮傘下の集落の当番を引き受けたときには、年末の仕事が伊勢神宮の御神札売りだということを知らなかった。神社を見学しても参拝したことのない者がおふだを売って歩くのはおかしいけれど仕方がない。現代ではないなかでも買う人が少なくなつたことを知る。今日、おふだの舞う話ではないが、「世直し」という言葉のある文に出合つた。

古今東西を問わず「世直し」はゆくえの定まらぬ「怒り」がきつかけだつた——という樋口陽一の文である。雑誌『世界』の「破局の後を生きる」という東日本大震災特集号の巻頭にあるその文章は、三・一一のことを敢えて書かずに、S・エセルという人の『憤慨せよ』という小冊子を引いて、不正義に対する義憤を勧めている。フランスのレジスタンスに加わり、後にフランスの国連大使になつた九十三歳の人が、現在の世相に憤り、来るべき社会をデザインしたレジスタンスの「綱領」を対置しているという。その一つだけを孫引きすると、「すべての市民に、その労働によつて確保することが不可能となつた場合に生存手段を確保する社会保障の完全なプラン」。これは他ならぬ日本国憲法二五条に当たるではないかと、長く憲法の理念の普及に身をささげてきた本物の学者は言う。引用されている「綱領」はどれも実にまっとうだ。この巻頭文は三・一一後の状況の中で

出合った最も貴重な文章の一つだ、と思う。大震災だけでなく多くの場で、基本的で普遍的な価値が今危険にさらされている。みぞれを降らせた雲が皆既月食を隠しているが、天は、命を革めるべき時と告げているのではないか。いや、おふだの降ることのない現代、この問題は初めから人事であって、年月がかかっても、人間がどうにかしなければならぬ。

十二月十三日

焼杉に防腐剤塗りこの身より長く残れと人の営み

(寓居の壁)

十二月十六日

「了解することもなく」

初雪に水が澄んで

魚たちは身をひきしめ

雪雲に陽を遮られて

木々は身を削り直す

わずかな知恵も凍えた男は

ただその頬の線を整える

すべての生き物が

冬の至りを感じて
一年の経験は身に浸みわたる

十二月二十二日 歳末を孫と遊んで日は長くわが身心に時降り積もる

十二月二十三日 残照を身に蓄えて木守り柿

十二月二十四日 重層し褶曲を経た複雑な社会に在って拙く生きる

十二月二十八日 紙やすりで積もった過去を煤払い

わたしの汚れは落とすことができない。

本日のNHKニュース。隣国の異様な葬儀の映像のほかに、四つ。一、米軍基地移転のための中央政府の書類が、沖縄県庁で県民の人垣に阻まれて、午前四時の夜陰に搬入。二、原子力発電所事故で放出された放射性物質の中間貯蔵施設を、汚染のひどい発電所周辺の町村の中に建設したいという中央政府案が、当該町村長に伝えられた。中間貯蔵三十年という長い

年月の後どこで処理するか決まっていらないのだから、場所の選定は至難だろう。三、政府は消費税増税の概要を与党に示して、年内に成案を得ようとしたら、与党内から十名の反対議員が離党した。調整できるか不明。四、先日の選挙で勝利した大阪市長が、大阪府構想という行政構造改変の「施政演説」。中央の政党がすり寄ろうとしている。

一日のニュースが、日本政治が機能不全に陥っていて、オポチュニストがその間隙を衝こうとしている、ということ教える。それらは政治変動の予兆のようだ。どのような時間経過になるか分からないが、変動が起これざるをえない状態に見える。底流では日本と世界の経済危機が深まりつつあるから、変動が大きなものになる可能性が高い。そして歴史は、大きな政治変動では多くの人間が深刻な被害を受ける、ということも教える。老いて、平安でない未来を予想しなければならないのはつらい。楽天主義は意志するものだと言ったのは誰だったか。

十二月三十日

行く年をねぎらい送るわが池のポインセチアで艤装した舟

十二月三十一日

成った蕪抜いて明日は初雑煮

(餅は昨日餅つき機でついた)

二〇一二年 正月
白江庵 謹製



J・S・ミル

さて、このような高邁な精神を人に吹き込む一大源泉となるものは、詩であり、詩的、芸術的文学と呼ばれるものです。・・・

・・・詩には、魂を昂揚させると同様に魂を平静にし、昂揚した感情のみならず穏やかな感情も涵養するという偉大な力があります。詩は、われわれの本性の非利己的な側面に訴え、われわれが属している制度の幸不幸を直ちに自分自身の喜びや悲しみとするそういう人生の一場面一場面をわれわれにもたらし、また、行為を直接導くものではないが、真剣に人生を考えさせ、そしてわれわれの前に義務としてあるものすべてを引き受けさせる厳粛な、思いやる感情をわれわれの胸底深く刻み込みます。・・・

